

令和3年度

## 第2回総合教育会議会議録

(開会 令和4年2月16日)

(閉会 令和4年2月16日)

岐阜県可児市教育委員会

令和4年2月16日午後1時00分開会

### 出席者

富田成輝君（市長）	堀部好彦君（教育長）
丹羽千明君（教育委員）	小栗照代君（教育委員）
長井知子君（教育委員）	伊藤小百合君（教育委員）
渡辺勝彦君（事務局長）	石原雅行君（教育総務課長）
今井竜生君（学校教育課長）	上北泰久君（学校教育課主任指導主事）
千葉智治君（教育研究所主任指導主事）	杉本和昭君（教育研究所指導主事）

### 教育委員会事務局職員

木村彰伯君（教育総務課総務係長）	中水麻以君（教育総務課総務係）
小池拓哉君（教育総務課総務係）	

### 開会宣言

- 市長（富田成輝君） 令和3年度第2回目の総合教育会議の開会を宣言。

### あいさつ

- 市長（富田成輝君） 本日は議題が2つ、どちらも大変重要な内容であるため、忌憚のない御意見をお願いしたい。

### 議題1 コミュニティ・スクールについて

- 市長（富田成輝君） 事務局から説明を。
- 学校教育課主任指導主事（上北泰久君） 資料をご覧いただきたい。

現在の学校評議員と学校運営協議会（コミュニティ・スクール）との違いを図示している。学校と保護者、地域の関係が学校に対しての一方である学校評議員に対し、学校運営協議会は、学校、保護者、地域住民がそれぞれ当事者意識をもって、パートナーとして連携・協働する双方向の関係で、皆が関わり高めていくというものである。

可児市としても、国の指導で実施するというものではなく、学校の諸活動や地域の触れ合い、ふるさと教育の実態等を踏まえて順次行っていくことを考えており、令和4年度は旭小学校と広陵中学校において実施していく見込みである。

旭小学校周辺には、北姫財産区のえがおの森があり、この自然を生かし、学校の宝にしよう動き出した。具体的には落ち葉をベッドにしたり、木を切ってほうきにしたり、ロープを張って綱渡りするといったことを通して五感を磨くことを意識して、えがおの森を利用している。

このほか、PTAによる給食エプロン修繕、トイレ掃除ボランティア、交通指導等、当事者意識を持って取組が始まっており、学校評議員でも、それぞれの活動について学校からの報告を受けながら意見を出し合い、当事者意識を持って今後の旭小学校をみんなで考え、応援していこうという機運を高めている。

このように、それぞれの動きが目指す方向となり、旭小学校のコミュニティ・スクール、笑顔のもとを育んでいこうとしている。

広陵中学校もエール広陵が既に以前から同様の動きをしており、来年度以降、各学校は、旭小学校や広陵中学校の動きを参考にしながら、それぞれの笑顔の学校の特色を生かし、順次それぞれの段階に応じてコミュニティ・スクールへ移行し、学校独自の取組、笑顔のもとを育んでいくことを考えている。

「子どもたちの応援団（地域と学校で子どもを育てる）コミュニティ・スクール」として、目指す方向が一致し、子供たちの笑顔のもとを育むことを目標に、それぞれの学校が取り組んでいく。

- 市長（富田成輝君） 御意見のある委員の方、御発言いただきたい。
- 教育委員（丹羽千明君） コミュニティ・スクールについては6年ほど前、教育委員の研修で東京方面に視察に行った際、実際にコミュニティ・スクールをやられている方と校長先生から、運営の難しさとよさ、長所・短所などいろいろお話を伺った。

可児市では、エール広陵という組織が4年ほど前に立ち上がり、着実に学校、地域にも認められている実態があり、着実に進んでいると感じている。

学校評議員は今どこの学校にもあるが、年2回報告があり、学校のことを各種団体の長に知っていただくというような性質に変わってきているかと思う。その点、コミュニティ・スクールは、学校にもっと関わっていただく仕組みで、大きな学校は結構大変だとは思いますが、小規模なところから始めたらいいのではと思う。

先ほど申し上げた視察では、なかなか学校との連携がうまくいっていないと言われていたため、やっぱり地道な活動から始めていくといいかと思う。

- **市長（富田成輝君）** 学校との連携ができていないというのは、具体的にどういうことか。
- **教育委員（丹羽千明君）** 例えばエール広陵は、授業などは最近だが、交通安全、挨拶運動など学校の支障にならないことから始めて、今はもっと関わっているということだが、視察で伺った学校は、コミュニティ・スクールの方が授業を受け持つなど結構入られていて、それが教職員の理解をうまく得られず、ちょっと困っているということだった。
- **市長（富田成輝君）** 私のイメージしているコミュニティ・スクールは、学校の授業とは基本的には関係なく、何年か前に地域の人が先生になって授業をやるような動きが都会を中心にあったがそれに近いのかもしれない。今回のコミュニティ・スクールは違うのでは。
- **学校教育課主任指導主事（上北泰久君）** 授業ではなく、地域の中で通学の見守りやPTAでの関わりが主である。
- **市長（富田成輝君）** 授業の中でも社会的なこと、自由課題など、ああいう授業に関わるということはあるけれども、要するに科目に関わるということはないのでは。
- **学校教育課主任指導主事（上北泰久君）** 確実にないと言えるかどうかは不明だが、手伝いのような形はあるかもしれない。
- **市長（富田成輝君）** あくまでも教諭がイニシアチブを取る中で、先生の手伝いはあると思う。
- **教育委員（伊藤小百合君）** エール広陵については自分も担当校だが、先生方が多忙を極めている中で、勉強を教えること以外で先生方を応援、支援することが何かできないかと、最初は運動場の草刈りから始まり、登下校の安全の見守りや、特別支援学級に入って琴を教えたり、陶芸や生け花も教えている。  
通常、2年生に職業体験があるが、コロナ禍で職場に行つての体験ができないため、職業講話という形に変わっている。今年はエール広陵の中で新聞記者や行政書士の方など、いろんな資格を持っている方がいるため、職業講話の先生としてお話を聞いて役立っていると伺った。  
先生や子供たちにとって、エール広陵の方々が、周りにいるのが当たり前な存在に今変わってきているということは校長先生からも子供たちからも聞いている。
- **市長（富田成輝君）** 先ほど申し上げた何年か前に授業そのものを応援しようという動きにも似ている部分はあるのではないか。それがあまり積極的過ぎて、先生と考えが違ってきたりすると上手くいかなくなるのかもしれない。
- **教育長（堀部好彦君）** そうだと思う。場合によっては学校側の願いとずれが生じてしまっているケースもあるのではないか。

- **市長（富田成輝君）** 進んでいくと逆にそういう問題もあるかもしれない。ただ、確かに今の先生は非常に多忙であるため、いろんな方にお力を借りるということは、基本的にいいことだと思う。
- **教育長（堀部好彦君）** 教員の多忙化解消の視点からエール広陵が立ち上がってということがあったが、今回のコミュニティ・スクールについては、さらに一步踏み込んで、校長がこんな学校をどうしてもつくりたい。そのために地域の人に力を貸してほしい、そんな流れにしたい。それが組織の形骸化を防ぐことにもなるのではないか。  
未来の子の笑顔につながる、笑顔のもとを育もうと、それぞれの学校でどんな笑顔のもとを育みたいのか考えてもらい、各校の特色ある教育活動を生み出したい。その流れの中で、旭小学校のえがおの森の話が出てきて、校長は本当にやる気で、五感を引き出す、想像力を引き出す、そんな子供たちの笑顔のもとを育みたいんだということで、そのために学校の職員だけでは困難なため、地域の人に手伝ってほしい。そんな流れをどの学校にもつけれないか、コミュニティ・スクールを笑顔のもとを育むということの重要な柱にしていけたらと思っている。
- **市長（富田成輝君）** 大変すばらしい話だが、次の校長が引き継いでいけばいいが違う考えだとどうかという気もする。やはり主体が地域なのか校長なのか、その辺は整理する必要があると思う。そのため、校長がコミュニティ・スクールの方にこういうふうにしたいという思いを伝えて、地域がそれはいいから一緒にやろうということになれば、校長が人事異動で代わっても基本的には変わらない。
- **教育長（堀部好彦君）** 大変鋭い御指摘だと思う。確かに校長が代わるとどうかということは考えられるため、資料に示してある「目指す方向が一致」というのが今まさに市長が言われたことではないかと思う。
- **市長（富田成輝君）** 日本はアメリカほど学校ごとに方針が全く違ったり、校長が変わると先生も大きく変わったりといったことはないが、やはり大事なものは、子供たちのためのコミュニティ・スクールであって、どういう子を育てるためにうちの学校はコミュニティ・スクールをやるのかというところを、やはりきちっと三者で合意することが大切である。  
例えば、少しでも健康な体をとるか、友達思いとか、コミュニケーションとか、そういったどういう子を私たちの地域は育てたいのか。それを先生だけに任せるとするのは当然無理なので、笑顔のもと、どういう子たちになると笑顔になっていくのか、どういう子たちにするのが笑顔のもとかというところを、コミュニティ・スクールの目的を最初に明確にしておくことが重要である。
- **教育長（堀部好彦君）** 本当にそう思う。
- **市長（富田成輝君）** そこで十分地域、保護者、学校が議論することが必要である。スタートはいつからか。
- **学校教育課主任指導主事（上北泰久君）** 旭小学校と広陵中学校は土台ができているため、来年度の4月からで、それ以外の学校は、そういった形ができてからの予定である。
- **市長（富田成輝君）** であれば今年度中に改めて2つの学校においてどういうコミュニティ・スクールを育てたら笑顔のもとができるのか、そのために何をやるのかと

いうところをきちっと合意しておく。そこがコミュニティ・スクールを認めるポイントになる。誰が認めるのか。

- **学校教育課主任指導主事（上北泰久君）** 教育委員会会議で決定することとなる。
- **市長（富田成輝君）** やはり教育委員会が認めないといけないと思われる。こういう活動をしてくれるなら、確かに笑顔のもとができるといったことなど。4月1日にこだわる必要はないため、スタートに当たっては、コミュニティ・スクールとは何であって、旭小学校、広陵中学校はどういう子育てを目的として行うかの大枠を整理しておくことである。そこを最初にしておかないと、先生とコミュニティ・スクールの方の意見が違ったり、それぞれの思いで走っていくといけないと思うので。
- **教育委員（丹羽千明君）** 地域でちゃんと育てていただき、それを応援するという形がいいと思う。

また、大規模校より小規模校のほうがつくりやすいと思うため、小規模特認校である兼山小学校は、地域の方からもぜひ応援するという形にさせていただけるといい。

- **市長（富田成輝君）** そのほか、よろしいか。  
まとめると、スタート前にコミュニティ・スクールが何を目指してどういう子供たちを育てて笑顔のもとをつくるかということをも十分議論してもらい、それを教育委員会の場で確認してからスタートする。まずは、今既にコミュニティ・スクールらしきものが動いている学校を基にしてやっていくと。あまり学校の色が出過ぎてもいけないし、保護者が出過ぎても、地域が出過ぎてもいけないので、その辺りの三者の合意というのが一番ポイントになる。

ただ、やはり一番大事なのは、校長先生の思いであり、学校であることには間違いないので、校長先生の思いが地域、保護者にきちっと伝わっていくというのも、非常に有効なポイントになるだろうと思う。

## 議題2 不登校児童生徒対策について

- **市長（富田成輝君）** 最近可児市が非常に不登校の子が増えているという状況について、重要かつ非常に難しい問題だと思っている。事務局から状況説明を。
- **教育研究所主任指導主事（千葉智治君）** 近年、不登校児童・生徒の数は増えており、今年度も12月末現在で201名の児童・生徒が不登校である。

不登校児童・生徒の居場所として、教育研究所内にある適応指導教室のスマイリングルームにて、室長以下5名のスタッフで不登校の子供たちの対応をしており、教職経験を生かして子供たちの学習や仲間との関係づくり、登校に関する支援をしている。

また、不登校に関する相談にも応じており、保護者との懇談のほか、関係機関がそれぞれの立場で不登校児童・生徒の情報を共有し、支援方法を話し合うケース会議にもスマイリングルームスタッフが参加している。

今年度は、61名の児童・生徒がスマイリングルームに登録し、このうち常時約10名から15名が、ほぼ毎日通室している。学校復帰など改善が見られた児童・生徒は23名、週に1回のチャレンジ登校日に学校へ行ける児童・生徒も多くいる。

そのほか、学校においては、不登校傾向の生徒のために中学校を中心に相談室が開設されており、教室で大勢の仲間と一緒に学習することが苦手な生徒に担当の教師が寄り

添い、生徒のペースに合わせて学習ができるような環境を整えている。

今後は、a1aとも連携し不登校傾向の児童・生徒の居場所づくりを模索していきたい。例えば、a1aまち元気プロジェクトの一つとして、将来の就業に結びつくような職業体験的なプログラムを中学生に展開できないかを検討している。

不登校の未然防止にも力を入れ、笑顔のもと、子供たちの将来の笑顔につながる育みたい力を明確にし、それを育てるために各校で特色ある教育活動に取り組むことで、子供たちの自己肯定感、自己有用感などを高め、不登校の防止につなげたいと考えている。

また、子供たちの心を育てる新しい心理教育プログラムを開発し、各校で先生が実施できるよう準備する。この心理教育を行うことで、子供たちにはバランスの取れた素直な認知の大切さを理解してもらい、よりよい人間関係づくりに役立ててもらいたいと考えている。

○ **市長（富田成輝君）** それでは、御意見をお願いしたい。

○ **教育委員（長井知子君）** 去年の6月に学校訪問をした際、ある中学校の先生が、子供たちは学校に行きたい、高校に行きたいが行けないということで苦しんでいるため、学校としては、そういった高校に行きたいという子供たちを何とかしてあげたいと、試行錯誤してタブレットなどを取り入れていると話された。

今、コロナ禍によりオンラインで授業を実施しているが、画面上に参加者の顔が映らない、自分が映らないということで、不登校の子が授業に参加でき、本人もそれを見ていた母親も、授業が受けられたことがすごくうれしかったという話を聞いた。

子供も学校に行けず苦しいが、親も同じように苦しんでいるため、親御さんへのサポートも今後充実させていけたらと思う。

○ **市長（富田成輝君）** 不登校になる理由は人それぞれ違うが、問題はささいなことを言われて行けなくなってしまうその原因である。ささいなことを言われたことは直接の原因かもしれないが、問題はそういうことを言われたら不登校になってしまうというメンタルの弱さ、傷つきやすさというか、それがなぜそうなったのかということが、特にここ最近ずうっと増えてきている理由として、何か社会の中にあると思われる。

○ **教育長（堀部好彦君）** 市長御指摘の点について、ささいなことと思われることをどう子供たちが受け止めてしまうのか、そういった認知のゆがみを何とか直せないかといったことを今研究所で考えている。先ほど、千葉主任指導主事も少し触れたが、その点について説明をお願いしたい。

○ **教育研究所指導主事（杉本和昭君）** 可児市のスクールカウンセラースーパーバイザーの先生のお力を借り、子供たちのよりよい認知を育むための心理教育プログラムを今作成している。

ある事象に対しての捉え方、メンタルが弱い、傷つきやすい等あるため、そこを少しでも改善するために、令和5年度から各学校で先生方に実践いただけるよう認知を育むためのプログラムを来年度1年間かけてつくろうと思っている。

また、来年度、各学校へスーパーバイザーの先生に行っていただき、子供たちは今どういうことを課題に思っているか、どういう認知が大事なのかということも御指導いただこうと思っている。

- 市長（富田成輝君） 昔から傷つきやすい子はいたが、これほど多いというのが。
- 教育長（堀部好彦君） 教員が褒めても、その褒め言葉がそのまま伝わっていかず、何か懐疑的に捉える。そういう子も増えていると思われる。
- 市長（富田成輝君） ほかに何か。
- 教育委員（小栗照代君） 県外に知り合いの不登校のカウンセラーがいるが、やはり先生が子供のことを認めて、信頼して、あの先生がおいでと言ってくれるから学校に行きたいんだというような関係ができるのが、一番学校に行けるようになるという話を聞いた。その子を認めてあげるような声かけをとにかく先生にしてもらうのがいいということだった。例えば不登校であったら家を訪問したときや、予防という意味でも学校で、その子自身を認めるような声かけをするようにしてほしいということだった。
- 市長（富田成輝君） 逆にあんまり認められると、それが重荷になってしまうということはないか。
- 教育委員（小栗照代君） それもあると思うが、不登校の子たちはやはり自分自身をなかなか認められているという自覚がないと、どうしても学校に行けなくなってしまふことが多いという話を伺ったことがある。
- 市長（富田成輝君） 極端な言い方かもしれないが、たとえ不登校になったとしても、社会に出たときにちゃんとやっていければいいと思う。
- 教育委員（小栗照代君） 本当にそう思う。
- 市長（富田成輝君） ただ、不登校になった子は社会に出ていけないという可能性が高いので、義務教育としては社会人としてそれなりに生きていける子を育てる責任があるため、学校に来させるというよりも、そういう社会人を育てるという意味で、不登校が非常に問題という認識でいいと思う。だから、スマイリングルームでもどこでもとにかく来てくれて、あるいは家にいてもそれなりに学んで、最低限の常識を身につけて、外へ出られるようになってくれればいいが、なかなかそこが難しい。
- 教育長（堀部好彦君） 市として多様な学びの場を保障していくと。そういう点で、a1aは多様な学びの場のうちの一つに今もなっていると思うが、その連携をさらに推進していくことも大切かと思う。
- 市長（富田成輝君） a1aは文学座との連携の仕組みを使うのか。
- 教育研究所主任指導主事（千葉智治君） その通りである。演劇の手法を使ったコミュニケーション能力、それで表現するという心と体のワークショップを行う予定である。
- 市長（富田成輝君） 演劇の手法を取り入れるのは確かに面白い。学校へは来られないが、a1aには行けるといふ子にはいいかもしれない。
- 教育長（堀部好彦君） そういう子がいてもいいんだと、学びの場が保障されて。
- 市長（富田成輝君） 多様性の一つである。

文学座の方が実際にやられる現場を見たことがあるが、例えばプロポーズの場面、どういう思いでどういう言葉でどういう言い方をしたら相手の心を動かせるかというのを真剣に考えてやる。そうすると、最初はノーでもそのうち本当にイエスと心から言えるようになる、といった授業を行っている。言葉の力。要するにコミュニケーション力。

そういう力を子供たちに、逆に言うと嫌いだと言われてもへこたれない力なども身に着くのではないかと思う。

- **教育長（堀部好彦君）** 小学校で今実施している心と体のワークショップは言葉というよりも、お互い目線を合わせるとか動作で伝えるとか、そういった動きの表現でコミュニケーションを取るといような取り組みである。
- **市長（富田成輝君）** そういうのもある。椅子取りゲームを変形させたもので、ランダムに椅子が会場にあって、椅子のない人が狙って椅子を取りに行く。その際ルールがあり、その人に触られたら負けになる。そのため、自分の椅子に来ると思ったら、別のところへ行かないといけないが、別で座ってる人もどかないといけない。それを上手にやらないとその鬼が座ってしまうので、どく人は鬼よりも先に、自分たちの仲間がそこに座ってくれるタイミングでどかなければならない。あまり近づいてからどくとかののところへ行けないから、暗黙のうちに近づいてきたときに、私どくから、あなた座ってねといったように動く。
- **教育長（堀部好彦君）** そういう暗黙のコミュニケーションが成立する。
- **市長（富田成輝君）** 言葉はなしにお互いに自分がどくからあなた来てねといった訓練をするなど、いろんなパターンがあって面白い。

また、市内における不登校表出の傾向や特徴、ここ数年どこの地区で急激に増えているのかなど、何かヒントがあるかもしれない。

外国籍の子が不登校に多くなっていれば、外国籍児童・生徒の多い校区の不登校が増えるはずだが、調べてもらった際、それはあまり関係ないようである。外国籍の子は日本人の子に比べて不登校の割合は多いが、日本人の子ほど増えてはいない。明らかに日本人の子の不登校が増えている。外国籍の子が多いことが、不登校が増えている原因になっているわけではないということが数値から読み取れる。日本社会に何か事情、理由があるのではと考えられる。

不登校はできれば避けたいが、不登校になったとしても学校以外の場所だとか、いろいろな方法でその子が社会に出ていくような仕組みを考えていくということが1つ。2つ目は不登校になってしまわないように、早めに見つけて手を打っていく。そして、3つ目には不登校になった人に少しでも早く学校に復帰できるような仕組みをしていくと。その3つを、教育委員会や先生だけではできないため、a 1 aの話が出たが、それ以外にも方法も考えていかなければならない。

#### その他

- **教育総務課長（石原雅行君）** 前回7月の総合教育会議で協議いただいた兼山小学校の小規模特認校制度の進捗状況についてであるが、制度を設けた結果、現在5世帯、8人の入学が決定した。これにより、来年度は複式学級を解消できる予定である。
- **市長（富田成輝君）** その他あれば。

〔挙手する者なし〕

#### 閉会宣言

- **市長（富田成輝君）** 令和3年度第2回の総合教育会議の閉会を宣言。

閉会 午後 2 時00分